

論文内容要旨

論文題目

重粒子線治療に向け内分泌療法を受ける前立腺がん患者の

身体活動レベルと健康関連 Quality of life との実態と関連

教育・研究領域： 生涯生活支援看護学

氏名： 田中 真莉恵

【内容要旨】

目的：1) 重粒子線治療に向け内分泌療法を受ける前立腺がん患者の身体活動レベル(Physical activity level: PAL)と健康関連 Quality of life(QOL)の実態と関連を明らかにする。2) 重粒子線治療の外来初診時と照射 2 週間前の健康関連 QOL の変化と身体活動レベルとの関連を明らかにする。

対象者：山形大学医学部東日本重粒子センターでの重粒子線治療に同意した前立腺がん患者 112 名。

方法： Expanded Prostate Cancer Index Composite(EPIC), SF-8 を用いた自記式質問紙調査を行い、PAL によって 3 群に分け、比較を行った。

結果：PAL は低群 93 名 (83.0%)、中群 4 名 (3.6%)、高群 15 名 (13.4%) であった。低群に比べ高群は外来初診時点の排便と性機能の QOL が低かった。外来初診時と照射 2 週間前の QOL は、高・中群では有意な変化はなかったが、低群のホルモン領域の QOL が有意に低下していた。

結論：重粒子線治療に向け内分泌療法を受ける患者は身体活動レベルが低く、内分泌療法の副作用や心理状態に対して身体活動レベルを考慮した看護支援の必要性が示唆された。

令和 3 年 12 月 16 日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 田中 真莉恵

論文題目：重粒子線治療に向け内分泌療法を受ける前立腺がん患者の身体活動レベルと健康関連 Quality of life との実態と関連

審査委員：主審査委員 齋藤 貴史



副審査委員 片岡 ひとみ



副審査委員 佐藤 和佳子



審査終了日：令和 3 年 12 月 16 日

【 論文審査結果要旨 】

前立腺がんでは重粒子線照射開始前に内分泌療法を 4~6 ヶ月間行うことが標準治療となっている。重粒子線照射前の患者は、内分泌療法の副反応と照射開始前の焦りや不安を有する心理状態にあることが推測されるため、看護師は患者が身体面・精神面ともに良好な状態で治療に臨めるような支援を行う必要がある。本研究の目的は、重粒子線照射に向け内分泌療法を受ける前立腺がん患者への有効な看護支援の在り方を明らかにするために、内分泌療法を行っている前立腺がん患者の治療説明時の身体活動レベルと健康関連 Quality of life (QOL) の実態および関連性、更に治療説明時と照射 2 週間前の身体活動レベルと健康関連 QOL の変化を検討することである。対象は山形大学医学部附属病院で本治療の説明を受け同意が得られた前立腺がん患者 112 名である。調査は、自記式質問紙調査を用いて、治療説明時には 112 名全員に実施し、照射 2 週間前まで経過を追跡できた 47 名については 2 回目を実施した。身体活動レベルは Physical Activity Level (PAL) を算出し低・中・高群に分類し、健康関連 QOL は Expanded Prostate Cancer Index Composite (EPIC) および SF-8 health survey (SF-8) を用いて評価した。治療説明時に調査した 112 名において、PAL は低群 93 名 (83.0%)、中群 4 名 (3.6%)、高群 15 名 (13.4%) であった。また PAL 低・中・高群の基本属性において、年齢 (低:71.4 歳 vs. 中:76.5 歳 vs. 高:67.6 歳, $p<0.05$) および就業者数 (低:59/93 vs. 中:4/4 vs. 高:15/15, $p<0.05$) に有意差が認められた。治療説明時および照射 2 週間前まで経過観察を行い、2 回の調査を施行できた 47 名について、健康 QOL を 2 時点で比較したところ、EPIC のホルモン領域の機能と負担感および性領域の機能に関するスコアは PAL 低群で有意に低下し、SF-8 の精神的健康に関するスコアは PAL 高・中群で有意に上昇することが明らかとなった。以上から、重粒子線治療に向け内分泌療法を受ける前立腺がん患者は身体活動レベルが低い割合が高く、本研究で支援の重要性が示された内分泌療法の副反応や心理状態に基づく QOL 各項目に対して、身体活動レベルを考慮した看護支援の推進が必要である。本研究について、論文および口頭発表に基づき審査した結果、研究の目的が明確で、方法も妥当であり、結果には新知見が含まれ考察も適切であることから、本研究は学位論文 (博士) として相応しいものと評価した。